

二つの大隈胸像とその制作者ペッチ

弓野正武

はじめに

取り壊されることになった早稲田大学高等学院の建物の入り口に、大理石の胸像が一つ残されていた。それは、長いことそこにあるため、当たり前前の風景となっていた。人の口の端にもほらなかったが、紛れもない大隈重信の胸像で、制作者はイタリア人彫刻家オッテイリオ・ペッチである。ブロンズ製の大隈重信立像はあまりにも有名なが、この唯一残された小さな胸像についてはほとんど知られていない。ここではその由来を探ってみたい。

一 様々な大隈像

大隈重信の全身立像は早稲田大学大隈記念講堂脇の庭園側回廊にある大札服姿、早稲田（本部）キャンパスの総長ガウン姿、国会議事堂中央広間のフロックコート姿の三体の銅像が有名である。⁽¹⁾ また一九一六（大正五）年一月五日に除幕式を行った芝公園の銅像もまた巨大なもので、台石上に衣冠束帶姿で据えられ、当時の地図にも芝公園の南側に「大隈銅像」として記入されていた。この像は戦時中に供出されたといい、今は写真を残すだけで、台石さえ痕跡を残していない。⁽²⁾ 早稲田大学編『生誕一五〇年記念 図録大隈重信』には現存するブロンズ像のほか、一九一六（大正五）年の吉田松堂作「獅子吼」（竪五〇糎、横二三糎）という大隈全身像の木彫が掲載されている。

これに対して、早稲田大学高等学院には実物大の大隈重信の銅像が二体ある。一つは二〇〇一（平成一三）年早稲田大学理事会（総長奥島孝康）で大学の各箇所を設置しようということになり、「教旨」とともに設置されたブロンズ像である。原型の制作者は早大講師の櫻庭裕介氏で、初代早稲田大学図書館長市島謙吉像の制作者でもある。この原型を基に作成された胸像は大学関係各箇所におかれ、高校でも附属校の本庄高等学院をはじめ、系属校の早稲田中学校・高等学校、早稲田実業学校、そして、二〇一〇（平成二二）年開校の早稲田佐賀中学校・高等学校、大阪摂陵中学校・高等学校に至るまで設置された。⁽³⁾ 練馬区上石神井の高等学院・中学校では二〇〇一（平成一三）年九月に正門入口から二〇メートルほど入ったケヤキ並木の脇に据えられ、すでに当たり前のように教旨とともに日々学生に親しまれている。外来の保護者・参観者にもまず早稲田大学の第一の印象を与えている胸像といえよう。

だが高等学院にはもう一つの胸像があつて、七四号館入口の木製台上にのせられた大理石像である（高さ五八・五糎、



【写真①】 高等学院所蔵 大隈重信胸像



【写真②】 専修大学所蔵 相馬永胤胸像（筆者撮影）

幅七〇糎、奥行四三・五糎）【写真①】。この胸像彫刻は和服姿の両肩までの写実的なものである。こちらの像は旧七一
号館図書室入口におかれ、四〇年以上にわたり学院生には親しまれ続けていたものである。だが今日になってみれば、
この像の由来を知る者はほとんど学内にはいない。わずかに「創立者 大隈重信像」の木製説明板に目を留める人は
あっても、裏にある「Prof. Otilio Pucci 作」という墨書に気付く人は殆どいない。作者オットイリオ・ペッチの名
は美術書や辞典類にも管見のかぎりでは載せられていない。インターネットで検索すると『ニユース専修版ウェブ版
二〇〇二年一〇月号』に専修大学創立者相馬永胤像とともに「山県有朋、大隈重信像などを作った高名なイタリア人
彫刻家」と見える程度である。

この相馬永胤像は現在専修大学
生田校舎中央の一二〇年記念館
内正面ロビーの花崗岩の台石上
に据えられている（高さ八〇糎、
幅六四糎、奥行三三・五糎）【写
真②】。

大隈の大理石胸像については
その存在や由来を知るものは少
ない。しかし、四〇年ほど前、
一九七九（昭和五四）年、学院
創立三〇周年記念に纏められた

『三十周年記念誌』中に、元学院事務長の工藤安藏氏が次のように記録していたのである。細部の人間関係まで触れているので、ほぼ全文を以下に記しておきたい。⁽⁴⁾

これは、当時の岡田幸一院長と故難波正人学部長とのご尽力で昭和四十三年六月に理工学部から譲り受けました。現在大学庶務課にある大学貴重品登録カードによりますと、大正十年頃イタリアの彫刻家オッティリオ・ペッチ氏が来朝、当時の知名人の胸像を制作されていたらしく、その中で大隈老侯の胸像も制作、戦前の大隈会館玄関に設置された。これが戦災により焼失、そのころ同時に制作した大理石胸像が二体あって、そのうちの一体であること。他の一体は大隈老侯の生家、佐賀市にある大隈記念館に保存されてある由です。更に大学の所有になったいきさつを追ってみますと、このペシー氏が寄寓していた黒田氏宅に宿料の代りとして残して行つたと説明しています。現当主黒田正夫氏は保管に困り大学内に保管を依頼し、鑄物研究所に保管していました。その後木村幸一郎氏の紹介により大学に寄贈されたことが述べられています。

右文中の黒田正夫氏は元早稲田大学理工学部講師。受入れは、昭和四十二年九月十三日になっています。紹介者の木村幸一郎氏は勿論元早稲田大学理工学部教授だった方のことです。その後同年十月二十三日理工学部五十一号館二階のエレベーターのところに置かれました。胸像の箱型の台は理工学部で特別につくらせたもので、当初は箱の中に収めたもののようです。この話が持ち上った頃、丁度本学院は大学構内から離れていて、早稲田大学にゆかりのものがなかったのでとんとんびょうしに話すすみ、今日のようになったもののようにでした。

あのにぶい象牙色の大理石の胸像が、日夜七十一号館の玄関ホールで異彩を放っていますが、前に立つとふっと早稲田の真髄にふれたような気が脳裏をかすめるのを感じます。

ペッチの来日は「大正十年」ではなく、一九一六（大正五）年五月であるが、大理石像が三つあったこと、一つは大隈会館入り口に設置され、戦災で焼失したこと、一つは早くに佐賀の大隈記念館に移されていること（高さ七〇㎝、幅四〇㎝、奥行三五㎝）【写真③】、大学貴重品登録カードに大学受領の由来が記録されていることなど、それらの作品

大隈の三つの大理石胸像については、『早稲田大学百年史』には触れられておらず、ベッチについての記録もない。イタリア人ベッチについては、『東京朝日新聞』一九一六（大正五）年五月一〇日付朝刊と一九一九（大正八）年四月

学部金属工学科で「金属材料特論」や「材料力学」の講座を受け持った講師でもある。その黒田宅にベッチが何時から何時頃まで寄宿していたか、正確にはわからないが、大隈像を刻んでいたころは、まさに理化学研究所の設立の時期にあたり、高峰譲吉の息子と同じ船で来日したことに関係しているからであろう。黒田は木村が亡くなると、『建築雑誌』八六卷一〇四五号に「木村幸一郎君と雪」と題する追悼文を寄せるような親密な間柄にあった。

二 オッテイリオ・ベッチの来日



【写真③】 佐賀市大隈記念館所蔵
大隈重信胸像（記念館提供）

の伝領過程等が明らかになる。だが、ベッチの経歴や、何故大隈像を三つ作成したのか、また、両者はどのような交流をもったのか等は明らかではない。木村幸一郎（一八九六―一九七二）は早稲田大学理工学部建築学科を卒業後に理化学研究所に入所し、その後理工学部専任となった。黒田正夫（一八九七―一九八二）は、木村とガラスや雪氷の共同研究を行っていた理化学研究所員である。彼は東京大学工学部冶金科を卒業後、登山家としても有名になるが、理研に入所し、黒田研究室を主宰し、金属冶金の分野での専門家でもあった。また理研では

寺田寅彦にも師事して、日本雪氷学会会長も務めた。早稲田大学理工

二七日付朝刊に記事がある。一九一六年の記事は彼の来日を伝え、一九年の記事は三越百貨店での展覧会開催を伝えるものである。それによると、彼はイタリア生まれの彫刻家で、パリで東洋美術の大学教授をしており、第一次世界大戦の戦乱を避けて高峰譲吉の息子エブレン夫妻と来日し、展覧会までの二年余りの間に大隈の胸像も作成したことがわかる。

高峰譲吉は長崎の致遠館で大隈から英語を教授されていた。一八八七（明治二〇）年には農商務省技師として東京人造肥料会社を設立し、渋沢栄一を取締役会長に据え、後にアメリカにわたり、科学分野で成功（肥料会社設立、ジアスターゼ、アドレナリンの発見）をおさめた。「化学研究所」設立の用務で息子夫妻に遅れて帰国する。その後、大隈や渋沢、大倉喜八郎らの財界人を中心として理化学研究所が設立されるわけだが、その直前に息子のエブレンは、新婚旅行のため東洋汽船春洋丸で来日しているのである。この時イタリア人画家、彫刻家二人と一緒にあったという。この彫刻家がベッチである。彼が新聞記者に語ったところによれば、パリから逃れて、カナダから昨年ニューヨークに移り、「日本の風俗山水並に芸術を研究するつもり」で来日したという。作品展覧会の記事には「来朝二年余を唯静かに籠って兀々と石を刻む事にのみ送った、従って氏の彫刻家としての名は殆ど知られずに居ったが氏は其二年間に、山県公、大隈侯、渋澤男其他知名の人の胸像十余点を大理石に刻み上げた」とある。一九一九（大正八）年五月四日付の『時事新報』でも、「今回陳列の十数点は何れも渡日後の作で、山県公、大隈侯等名士の彫像と小品の塑像二点」を展示したと報道されただけで、ここでも彼が刻みあげた人物像の全容は不明である。

『三越美術部一〇〇年史』（三越編、二〇〇九年）によれば、彼は三越において一九一九（大正八）年五月三日から五日までの三日間と、一九二三（大正一二）年六月一三日から一七日までの五日間の、二度にわたって展覧会を開催していた。さらに広報誌『三越』第九卷六号（一九一九年六月一日発行）によると、一回目の場合は開催が急に決まった

ため予告は出来なかったとしたうえで、ベッチの略歴と展覧会作品について次のように報告している。

ベッシ氏は一八七九年伊太利ベルジャに生れ、同地の美術学校卒業後二十三歳の時巴里に赴き、同地のサロンに出品する資格を得、倫敦、紐育でも好評を博し、一九一六年日本に来朝されました彫刻家で御座います。

来朝以来、山県公や大隈侯や渋沢男等諸名士の大理石像を製作し、それら十点に銅の小像二点と氏の特参された欧州名画十一点を以て展観を催した

同誌は当時の新聞講評を引いて、ベッチが山県有朋（一八三八～一九三二）、渋沢栄一（一八四〇～一九三二）、相馬永胤（一八五〇～一九二四）のほか、三井物産の益田孝（一八四八～一九三八）、高田商会の高田慎蔵（一八五二～一九二二）らの彫刻を制作したとしている。作者がイタリア大使とともに写った写真を掲載した同誌には、六体の大理石胸像と二つの銅像らしい小品の写真も掲載されている。その大理石像を見るかぎりでは、大隈、渋沢、相馬らしい像のほかは、背広服着用の人物が判明する程度で、他の三体は判然としない。いずれも大理石の地山の上に等身大の胸像を刻んでおり、「手法も鮮やかでよく特徴を供えて居る」、「出来栄は表現の鋭さがまづ眼を惹き、如何にも確り物を掴んで居ると云う感がある」と講評されている。さらに彼はもう一度、一九二三（大正一二）年の第二回目の三越展覧会で小品の展覧会を催した。この場合も会場写真が一枚掲載されているが、著名人物の胸像としては一九一九（大正八）年に来日した京劇俳優梅蘭芳（一八九四～一九六二）のほかは女性像もあるが、大理石は少なく、多くが銅像であつて、小動物や日常生活をモデルとして、四四点を刻んだのみであつた。この二回目の展覧会について、新聞は事前の予告記事を麹町のアトリエでのベッチの写真とともに掲載するとともに、次のように報道している。⁽⁶⁾

お国に来てから六年、主として日本の人物其他を研究し、日本の方から多くの彫刻を頼まれ其の方の制作も随分試みた、山県公や黒木大將其他少なくありません、上流婦人や令嬢下町風の娘から芸者或は踊子なども製作しました

この発言により、新たに彼の制作した人物中に日露戦争の第一軍司令官で一九一七（大正六）年に枢密顧問官となった黒木為楨（一八四四～一九三三）の名が挙がっていることがわかる。

ここでの日本人による作品評価は、「どれも是も外人の眼に映じた日本婦人と云ふ、日本人の見るのとは全然感じの違った表現で、『足袋をはく女』など殆ど想像が着かない。併し是は異国人の眼から見ると、其證據には『梅蘭芳』の如きは我々の眼に映じたのと同じである」というものである。⁷⁾肖像彫刻は極めて写實的であり理解されやすいことをいったものである。他の美術作品については当時の日本人一般の美意識とは違った作品に映じたわけで、評論家には不評であつたのかも知れない。残念ながらこの時の目録・冊子類も残されていないと思われるので、彼が在日中にどれだけの大理石の胸像を刻んだのか、その作品全体を知ることができない。

三 著名人の胸像制作

彼が制作した大理石人物胸像について見てみよう。相馬永胤の胸像制作についてはどのような背景があつたのだろうか。『専修大学の歴史』（同編纂委員会編、二〇〇九年刊）では相馬の大理石像について説明することはないが、『相馬永胤伝』においてはすでに詳細に語られていた。⁸⁾

新宿区早稲田の甘泉園は近世の時期、芸州藩下屋敷で、その後、御三卿清水家の下屋敷となり、清水家当主徳川篤守とは相馬が米国エール大学留学時に懇意であつたことから、買い取つた経緯は詳しい。そこに、一九〇一（明治三四）年七月に清水邸三万五千坪を四万五千円で購入し、翌年六月一日に大隈伯を訪問したことが記されている。九年がかりで新築、造園がほどこされ、「甘泉園」の庭園ができたという。隣接する早稲田大学は、一九一六（大正五）年四

月、その地の一部九〇〇坪を運動場整備のため大学所有地九〇〇坪と交換している。⁽⁹⁾ ベッチ来日の年である。一八八〇(明治二三)年、専修学校創立に参画し、一八八八(明治二二)年初代校長となった相馬永胤は、一九〇六(明治三九)年九月大学組織へと改編し、初代総長となった。はやく横浜正金銀行頭取ともなり、晩年まで取締役でもあった。米国から帰国後、早くから経済・教育面で社会的に指導的立場に立っていたわけで、当然大隈とも、早稲田大学とも、昵懇の間柄であったことが伺えるのである。また、ベッチ作の石像についても同書は詳細に記録している。日記の一九一七(大正六)年七月一七日条を引いて、「小田柿氏黒田氏並ベシー氏ヲ同伴シ来リ、自分ノ肖像ヲ取ル事ノ依頼アリ之ヲ承諾ス」と見える。一九一九(大正八)年に古稀をむかえる相馬のため石像制作の計画があったことが知られる。古稀の祝宴を行なった翌一九二〇(大正九)年五月三〇日に甘泉園で小田柿が中心となり相馬像の胸像除幕式がおこなわれ、彼が式辞を述べている。この「小田柿」とは相馬と同じ旧彦根藩出身で、一九一九(大正八)年に三井物産常務取締役となった小田柿捨次郎である。「黒田」とはベッチ寄寓先の黒田正夫関係の人物であろう。さらにベッチの経歴について、同書は「一八七九年イタリアのペルージャに生まれた。同地の美術学校を卒業した彫刻家で、その作品は、パリ、ロンドン、ニューヨークでも好評を博し、一九一六年には日本を訪れた。日本では山県公や大隈侯、洪澤男爵らの大理石像も製作し、その八年間の日本滞在中に、日本女性オクムラ・ウラと結婚している。とくに第一次大戦後、戦没者のための記念碑を、横浜と神戸に建てたことは有名。帰国してから一九五四年(昭和二十九)没した」と詳細に記している。⁽¹⁰⁾

洪沢栄一との関係はどうであろうか。一九一六(大正五)年に喜寿を機として第一銀行頭取、東京銀行集会所会長などの実業界から引退を宣言し、一〇月六日に帝国ホテルで辞任披露宴を開き、ここに三三四名の来賓を招待した。その席には大隈や松方正義らを筆頭に政財界の指導者がよばれたが、その中に三井物産の小田柿も参集していた。こ

の会に欠席した大隈らは翌年四月二日に帝国ホテルで政財界人四〇〇人以上が参加する渋沢の功労を感謝する「青淵先生招待会」を催行し、感謝状と記念品を贈呈した。この記念品の一つとして「寿像一基（伊太利人ベシー氏作大理石胸像）」というのが見える。⁽¹¹⁾それから三カ月後に、またベッチは渋沢に面会している。七月二日に「午後三時伊太利人ベシー氏来約（兜町）」、七月二三日には「午後三時 ベシー氏兜町ニ来約」とある。⁽¹²⁾兜町は渋沢の事務所である。来日から一年のうちに渋沢像を作成していたわけである。渋沢は明治初期に大蔵大輔であった大隈の下僚として銀行行政に携わって以来、大隈との深い絆があり、のち早稲田大学の永久維持委員の一人ともなり、大正期には大隈邸には頻りに往復していることから考えれば、ベッチはほぼ時を同じくして、大隈、渋沢の胸像制作に関わっていたことは明らかである。だがこの胸像は、現在の晩香廬にも渋沢史料館にも残されていない。もし渋沢の飛鳥山邸に完成品が置かれていたとすれば、大戦末期の空襲で焼失したのであろう。帝国ホテルには渋沢と大倉喜八郎の大理石胸像、および犬丸徹三のブロンズ胸像の三つが並んでいる。渋沢像には「大正一〇年四月」制作とあり、一九二六（大正一五）年の寿像除幕式の写真も残されているが、この胸像はベッチの作ではないようである。一九一六（大正五）年九月二五日には東京銀行集会所の落成披露会が麹町区永楽町に挙行され、三千人が参集する中で渋沢の寿像除幕式が行われているが、この胸像は小倉右一郎作の青銅製であったという。⁽¹³⁾渋沢像が作成されたのち、一九一七（大正六）年に小田柿は相馬永胤の寿像を提案したわけで、渋沢像を見たゆえの影響であろう。

三井物産創業者社長益田孝もまた明治初頭の大蔵省とのかかわりの中で、早くから大隈・渋沢・相馬とは昵懇の關係であった。当然ここにも小田柿の存在がある。この時に作成された大理石の益田孝胸像の存在も定かではない。益田は小田原古稀庵に隣接した掃雲台にある広大な農園の中に、早くから邸宅兼研究所を設けていた。山県とは垣根越しに行き来し合う間柄であったが、今はその邸宅の面影を残していない。

また、山県有朋も大隈と年齢を同じくするので、大隈とともに傘寿の寿像を作成したと考えることができるであろう。本邸は長く東京文京区の椿山荘であったが、晩年売却して麹町に移り住んだ。椿山荘は一九四五（昭和二〇）年の空襲で焼かれ、各地に山県の別荘は残っているものの、古稀庵にも、京都無鄰庵にも胸像は残されていない。

高田慎蔵もまた明治大正期の機械輸入業を中心とする貿易商社、高田商会の創業者で、当然、渋沢、益田とは親密な関係があつたが、その胸像の存在は不詳である。

四 彫刻界の状況とその他のペッチ

大隈・相馬・山県・渋沢・益田・高田・梅・黒木の胸像制作にあたつて、ペッチは、写真ではなく、存命中の人物をモデルとしていた。彼の作成した大理石の胸像は一九一七（大正六）年から一九二三（大正一二）年にかけての時期のものが明らかになるが、この時期は、小倉惣次郎（一八四五―一九一三）、新海竹太郎（一八六八―一九二七）らが東京で人物の彫像制作に励んでいた時期に当たっている。小倉に塑像を学んだ新海は、近衛騎兵だったことから、騎馬像を得意として、北白川宮能久や大山巖の像をはじめ、神戸大倉山公園の伊藤博文立像の原型（一九一二年作、台座のみ現存）を制作している。彼らが銅像を主体としていたのに対し、この両者から人物像の制作方法を学んだ北村四海は、茨城県常陸太田の真弓山産大理石「寒水石」⁽¹⁹⁾を使って女性像を盛んに制作することになった。彼等三人は若いころにいずれもパリ留学をした。一九〇一（明治三四）年夏に北村はフランスの彫刻家チウオルヂュ・パローの弟子となり、石彫を学び、ヨーロッパの美術界や日本人彫刻家たちに影響をうけた。二年後に帰国して大理石彫刻を始めたという。一九〇七（明治四〇）年以來展覧会出品を行い、一九一六（大正五）年から九年間、文展審査員を務めた。大理石彫刻

では我が国の唯一の作家といわれる。北村の作品は必ずしも多くはないが、その作品写真は養嗣子北村正信の手になる『四海余滴』に網羅的に収められている。代表作の安田善次郎夫妻の肖像彫刻をはじめとして、いくつもの寿像を作成している。当時の日本彫刻界は銅像や牙彫や木彫が主流であったとみられるから、北村は当然ベッチの作品には関心を払ったと推定される。しかし、ベッチは北村等の美術界とどのような交流をもったか。ベッチと北村等とのパリや日本での直接的交流は知られていない。ベッチは大正期にいわば亡命的に来日したため、自己の流儀を発揮するのは極めて困難なことであったと思われる。彼を受け入れる条件がどのように整えられたのか。来日直後でいきなり時の政界・財界の首脳に会見出来る条件は何であったのか。寄宿先のどのような条件のもとで、どこから大理石を調達したのか。まだいろいろと問題を残している。大隈像と相馬像の三体しか見ることはできていないので、彼が何人の大理石像を制作したか、また、制作の明らかな山県、渋沢、益田、高田、梅蘭芳、黒木らの人物像が残っているのかどうかさえ明らかにできていない。とはいえ、イタリア人ベッチの作品は大隈、相馬の作品を見る限り、当時の著名人物像を彷彿とさせるものである。ベッチにとつて幸いであったのは、彼の来日の時期が著名人達の寿齢に重なっていて、寿像制作の盛んになり始めた時期であったことであろう。いずれにしろ二つの大隈像と一つの相馬像は、動物や人物の肖像彫刻では青銅製が主流となっていた日本の彫刻界において、北村の作品とともに、今に残る数少ない大正期の大理石肖像彫刻として、貴重な作品群であるといえるであろう。

おわりに

高村光雲は『高村光雲懷古談』（新人物往来社、一九七〇年）の中で、一八八四（明治一七）年の日本美術協会や一八

八六（明治一九）年の東京彫工会の設立について詳しく語っている。当時は牙彫が主流の彫刻界であり、木彫は少数派であった。彼が一八八九（明治二二）年東京美術学校に加わって、はじめて日本画と木彫の二科が置かれ、木彫が盛んになり始めた。銅像は一八九三（明治二六）年に騎馬の楠公像を木彫と鑄造で完成する前は、大村益次郎の立像くらいであったという。以来銅像の立像が盛んになったようである。

のちに小倉、新海、西村らがヨーロッパに留学して彫刻を学び、明治後期から大正期の日本彫刻界をリードするようになった。そこには伝統と革新の動きがあった。ところがベッチの来日は日本の彫刻界とは別のものであった。ヨーロッパの伝統である。彼が来日して七年ばかりの間に仕上げた大理石彫刻は、日本の彫刻界とどのように交わり、どれだけの影響を与えたのか。ベッチの制作した人物胸像や作品名全体をつかめないことや、どれだけ残されているかも判らないままに、本稿では一部の作品をとりあげてその制作背景を説明してきた。作品の対象となった人物が歴史上の有名人であるだけに、由来のわからないまま保存されていることがありうるし、逆に新規に精巧な作品がたくさんできるようになってきている今日、古びた無益のものとして打ち捨てられる可能性も大きい。大理石胸像は銅像と違ってひとつしかない作品群である。小さな作品であっても、制作者の制作当時の熱い心や人との関わりは想像に余りあるであろう。

ベッチ来日のころ、一九一七（大正六）年二月三日、帝国ホテルでは早稲田大学の校友会を兼ね、早稲田大学基金管理委員長洪沢栄一の「喜字祝寿会」が開かれた。一月一六日には大隈の寿齢八〇歳の誕生日を迎えていた。大隈は自ら五月六日に校友四〇〇〇人を自邸に招き祝宴を張った。その年初秋に病をえたため延期されていた校友主催の寿宴は、一二月一六日に、一五〇〇人を芝公園紅葉館に集めて挙行された。翌年春の『早稲田学報』（二七五号、一九一八年一月一〇日発行）は、大隈総長祝賀記念号として盛大な寿宴の様子を伝えている。

(付記) 1. 拙稿「二つの大隈胸像」〔『早稲田大学高等学院研究年誌』五三号、二〇〇九年〕を併看していただきたい。

2. 本稿をなすにあたり、古賀雄三、真辺将之、桑原功一、関口八州男諸氏のご教示を得た。記してお礼を申しあげます。

補註

(1) 大礼服姿像は一九〇七(明治四〇)年の創立二五周年記念式に合わせて作成された小倉惣次郎作。同系石膏塑像は大隈記念室(西早稲田キャンパス二号館、旧図書館)に置かれ、複製ブロンズ像は佐賀大隈記念館前に立てられている。この複製の設置については、一八九八(明治三一)年

大隈内閣組成記念で、校友がつくった大礼服着用もののコピーが大隈重信誕生一五〇年を機に「大隈重信侯銅像建設期成会」会長香月義人(大隈重信侯誕生地記念会理事長)により、一九八六(昭和六一)年九月に佐賀の大隈記念館に建てられた。その建設経緯は『生誕百五十周年記念大隈重信侯銅像建立誌』(大隈重信侯銅像建立期成会、一九八八年四月)に詳しい。西早稲田キャンパスの立像は一九三二(昭和七)年一〇月の創立五〇周年記念式で建てられた

朝倉文夫の作品。国会議事堂内の立像も一九三八(昭和一三)年の朝倉文夫作品である。大学銅像にはめ込まれた新宿区教育委員会の説明板に「朝倉は都合三回 芝公園・大正五年、国会議事堂内中央広場・昭和十三年) 大隈重信像(立像二・八九m、二・一二m台石)を製作しており、この早稲田大学の像は、二回目にあたるものである」とあり、

創立五〇周年を記念して一九三二(昭和七)年一〇月に完成、桜花崗岩製の台石は桐山均一の作であった。『早稲田大学百年史』(第三卷、六〇五頁)には朝倉文夫の制作意図が記されており、また、桐山は宮繻課長として大隈講堂

の工事監督や演劇博物館や本部キャンパスの大隈、高田早苗の銅像建設に中心的に関わったことが詳記されている。のち建築学の授業を一九四一(昭和一六)年から四六(昭和二一)年まで担当した。平瀬礼太著『銅像受難の近代』(古川弘文館 二〇一一年)参照。

(2) 芝公園の立像については『早稲田学報』大正五年一月号に、「大隈侯爵寿像除幕式」の題のもと、一月五日の除幕式の様子が報じられている。戦時中供出されてしまったが、残されている写真によると、衣冠束帯姿の立像で、地図によると芝公園の南端に建てられていた。写真については新居房太郎編『偉人の俤』(二六新報社、一九二八年)及び公園協会所蔵写真参照。

(3) 『早稲田大学附属校系属校』早稲田大学教務部、二〇一〇年。

(4) 早稲田大学高等学院編『三十周年記念誌』、一九八〇年、八四～八五頁。

- (5) 『早稲田大学百年史』第四卷、八四四、九九四頁。
- (6) 『東京朝日新聞』一九二三年六月八日付。
- (7) 『三越』二三卷六月号（一九二三年）、一三〇一七頁。
- (8) 専修大学相馬永胤伝刊行会編『相馬永胤伝』専修大学出版局、一九八二年、五二〇～五二五頁。
- (9) 『早稲田大学百年史』第二卷、八三六頁。
- (10) 前掲『相馬永胤伝』、五二二頁。
- (11) 『洪澤栄一傳記資料』第五七卷、七〇四頁。
- (12) 「集會日時通知表」（『洪澤栄一傳記資料』別卷第二、四〇三頁）。
- (13) 『中外商業新報』一九一六年九月二六日付（『洪澤栄一傳記資料』第五〇卷、五七〇頁）。別卷第十写真 一二八頁。野依秀市編『青淵洪沢栄一翁写真傳』（実業之世界社、一九四一年）参照。
- (14) 八代修次・長谷鉄男共著『四海と正信の芸術』（鬼無里村教育委員会編「鬼無里の歴史と風土4」一九九二年）。北村正信『四海余滴』（非売品、一九二九年）。「北村四海」（山口高治郎『長野県美術大事典』九、郷土出版社、一九六六年）。なお、『常陸太田市史』民俗編（一九七九年三月）によれば、真弓山の大理石は建築用材として広く使われ、珍しい利用の仕方として彫刻材料があるとしている。しかし、近世にあつては水戸藩の留山であつた真弓山の「寒水石」は早くから彫刻材料としては優れたものであることは明らかで、北村四海の養子正信が「イタリアの大理石より

寒水石の方がいい」として、毎年秀作をものにしていてと認めているので、大正期の日本の石材の彫刻界ではこの地の大理石が多く使われたのであろう。明治前期にヴィンチェンツォ・ラグーザは寒水石を使った作品を残したが、その影響は少ないという（吉田朝子「ラグーザの教育とその影響―素材・技法の側面から」『明治の彫塑 ラグーザと荻原礫山』東京藝術大学藝術資料館編 二〇一〇年）。